

Sophia-R

Sophia University Repository for Academic Resources

Title	過去と如何に向き合うか : ニーチェの「生に対する歴史の利害」における歴史哲学
Author(s)	梅田, 孝太
Journal	哲学論集
Issue Date	2012-10-10
Type	departmental bulletin paper
Text Version	publisher
URL	http://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/00000033174
Rights	



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

過去と如何に向き合うか

—ニーチェの「生に対する歴史の利害」における歴史哲学—

梅田孝太

序

ニーチェの『反時代的考察』の第二篇「生に対する歴史の利害について」（一八七四年、以下『歴史書』と略記）は、ニーチェの著作中唯一「歴史」がテーマであることが明記された論文である。

「歴史」とは何か。「物語」とも訳される *Historie* は、はたして科学なのか。初期ニーチェ哲学のもっとも重要な思想源泉のひとつであったショーペンハウアーの著作では、以下のように述べられている。

「ただ歴史のみは諸学の列に加わることがまったく許されない。諸学と同様の誇るべき利点を有しないからである。すなわち歴史は知識を従属関係によって秩序だてるといふ学の根本性格が欠けており、その代わりに単に知識を並列しうるにすぎないからである。それゆえ他のいかなる学においてもみられるごとき体系というものは歴史には存しない。つまり歴史は知識ではあるが学ではないのだ」^[1]。

人間が過去と向き合い紡ぎ出す歴史は、決して集積しつくされない無数の個別のことからである。個別のことからの不十分でしかない集積は、客観的な普遍性を持ちえない主観的な「知識」にすぎない。それゆえ客観性を詐称する歴史学すなわち歴史

史の科学化は批判されるべきである。ニーチェは直接このショーペンハウアーの歴史論に言及してはいないが、『歴史書』において同様に歴史の科学化を徹底的に批判している。歴史はその本来の在り方を取り戻さなければならぬ。それが『歴史書』でニーチェが主張する「生に奉仕する歴史」である。ニーチェは、過去と適切に向き合うことなしに人間は生きられないと考えていた。過去を現在のために、そして未来のために活かすことが歴史の本来の役割である。

こうした若きニーチェの考えに従うならば、過去の文献を相手にする今日の人文科学の諸領域もまた同様の役割を負っているということになる。加速度的に肥大化し続けている情報化社会を見渡してみれば、その膨大なテキストを適切に活かせているかどうか、疑わしいところである。過去のテキストを紐解き、適切に活かすための技法を学ぶことは急務である。

ニーチェは『歴史書』の中でまさにそうした技法の考察に取り組んでいるのだが、あらかじめ解決されなければならない問題がある。歴史を記述するとき、如何に過去と向き合うか、である。

本稿ではこの問題に対する『歴史書』におけるニーチェの回答を析出するべく、以下のような手続きをふむことにする。第一節では、過去との向き合い方として『歴史書』においてニーチェが示している「歴史的なもの」と「非歴史的なもの」という時間理解に着目する。この時間理解は、いつも「亡霊 *Gespant*」のごとき過去にとらわれている、という『歴史書』における特異な人間像を浮き彫りにするものである。この「亡霊」としての過去の仮象性の洞察が、『歴史書』の通奏低音となっている。

人間は過去にとらわれて生きていく。しかしその「とらわれ」は、生きるために必要な「地平 *Horizont*」でもある。第二節では、そうした「地平」を生み出しているとされる「造形力 *die plastische Kraft*」の概念を取り上げる。「造形力」とは、「想起」と「忘却」という現象をひきおこす力である。「造形力」は過去を素材として、人間がそのうちに生きる「地平」をつくり出す。筆者の考えでは、『歴史書』におけるニーチェの「想起」概念と「忘却」概念とは、それらが切り離せない表と裏の関係になっており、その二重性を固有な特徴としている。「想起」されるコンテキストの影にはいつも、「忘却」されたコンテキストがある。

第三節では、「歴史的なもの」の構造を取り上げる。ニーチェは「歴史的なもの」を、「記念碑的歴史」、「尚古的歴史」、「批判的歴史」に大別していた。先行研究では「批判的歴史」を、歴史を相対化できるニーチェの立場であると見なしてきた。し

かし、「歴史的なもの」はそれ自身で歴史を相対化できるのか。過去の仮象性の洞察こそ、歴史の批判を可能にしたものではないのか。歴史を相対化する歴史哲学の思惟。『歴史書』におけるニーチエの歴史の科学化批判は、本質的には過去への「とらわれ」そのものがどう自覚されるかを根本的な問題としてしているのである。

第一節 歴史の過剰 (Uebermass) とその尺度 (Maß) の不在

ニーチエは、『歴史書』においてそのタイトルどおりに「生」に対して歴史が与える利害を叙述するどころか、書をしたさりに強調し、その危険性を訴えることにやっきになっているように見える。その批判の矛先は「歴史学 Historie」に向けられ、具体的には同時代の歴史主義者たちや、E. ハルトマンに対して向けられている。⁽³⁾

一九世紀後半のドイツに栄えた文献学は、人文主義の伝統を重んじ、それを修めた者を一流の教養人として認め、ニーチエもまたその一翼を担う人材であるはずだった。⁽⁴⁾ だが、ニーチエの眼に映った同時代の文献学は、歴史主義的な教養を称揚する歴史学でしかなかった。そこでニーチエは、文献学が本来目指すべきところを、歴史を「生」へと奉仕させることと定め、歴史学を批判する。「歴史が生に奉仕する限りにおいてのみ、われわれは歴史に奉仕しよう」(HL, Vorwort: S. 245) と言われる所以である。歴史学は「生」に奉仕しないのだ。これは一体どういうことだろうか。

ニーチエによれば歴史学は、人間を「思考機械」、「記述機械」にしてしまいかねないのだという (HL, S.: S. 282)。歴史学は客観的な科学を目指した。あらゆる過去の事象は連続的で直線的な表象のもとに、網羅的な体系に組み込まれる。しかしこうした客観性の追究は、自らが歴史を寛容させてしまい、同時に歴史によって自らが寛容することになったく無頓着な傍観者になってしまう危険をはらんでいる。

「近代人は、享受し遍歴する傍観者となつてしまい、大きな戦争や大きな革命に際しても、一瞬たりともちよつとした変容すらほとんど不可能な状態のうちに置かれている。まだ戦争が終わっていないのに、既にそれは十万回も印刷紙に移し変えられており、もう歴史を渴望する倦んだ口に最新の刺激剤としてあてがわれている」(HL, S.: S. 279)。

傍観者然とした態度は、ただ機械的に出来事を眺めるだけで、そうして弱められてしまふ「人格性」を顧慮しない (HL, S.: S. 284)。歴史学は、人間を没落させるほどに「過剰 Uebermass」なのだ。このことからニーチェも「尺度 Maß」の不在を根本的な問題として認めていることがわかる。たしかに人間は、膨大な過去の全体を客観的な事実の堆積として記録できはしないだろう。

ニーチェは「歴史を生に奉仕させる」というが、歴史学のような客観性を追求するあり方ではないとしたら、いかなるあり方なのか。言い換えるなら、人間はいかにして「適切に」過去と向き合っているのか。

この問いに対してニーチェはまず、時間理解の三つの系を提示している。つまり、時間理解としての、「歴史的なもの das Historische」⁵、「非歴史的なもの das Unhistorische」⁶、「超歴史的なもの das Ueberhistorische」である。⁷ここではハイデガーが用いた導入に沿って、「歴史的なもの」と「非歴史的なもの」との関係に焦点を当てたい。『歴史書』の第一節冒頭においてニーチェはまず、動物についての考察から出発する。

「きみの傍を、草を食みながら通り過ぎる群畜というものを考えてみたまえ。奴らは昨日が何であり、今日が何であるかを知らず、跳びまわり、食べ、眠り、消化し、再び跳ね、こうして朝から晩まで、毎日毎日、奴らの快と不快とに短く縛りつけられており、つまり瞬間の杭に縛りつけられていて、それゆえに憂鬱も倦怠もしらずに過しているのだ」 (HL, I: S. 248)。

動物は過ぎ去ったものをすぐさま忘却し、今という瞬間に行為していると考えられる。ならば、動物的な時間において一瞬間の時間はばらばらに断ち切られた点であり、その間の連続性は存在しない。動物的な時間は、「非歴史的なもの」なのだ。これに比して人間は、動物にとって非連続であるはずの点と点とを結びつけ、地平を紡ぎだす。人間にとって時間は、「歴史的なもの」なのである。この地平のうちにある人間の思考にとって、そのきっかけとなるのは必ず、すでに過ぎ去ったもの「想起」である。

「瞬間はたちまちにそこに来て、たちまちに去っていくのに、以前にも無、以後にも無であるのに、なおも」*Geſpenſt* として再びやって来て、次の瞬間の安らいを妨げる」(HL, 1 : S. 248)。

人間の時間意識は、すでに過ぎ去った瞬間の「亡霊」に絶えずとらわれ続けるという構造をもっている。今という瞬間は捉えられずに、今だった瞬間は、幽玄な仮象として想起されるのである。その実在性は決して確認されえない。というのも、自分にとって「そうだった *es war*」はずの過去として、或るコンテキストをその都度造り出すがゆえに、オルタナティブなコンテキストが成立した可能性は決して消えないからである。人間は、生きている限りすべての瞬間においてこうした「亡霊」から逃れられない。過去とはすべて人間が造り出してしまふ仮象であり、事実的な出来事としての過去はありえない。実体には決してたどり着きえないのに、仮象のみが出現する。これがニーチェのとらえた、過去の仮象性である。

こうした「歴史的なもの」・「非歴史的なもの」という時間理解の析出にあたってニーチェは動物の考察から出発してはいるが、そこではあくまで人間目線で動物を眺めるといふ態度が保たれており、「非歴史的なもの」という時間理解もまた、「歴史的なもの」と同様に人間のうちにある理解である。ニーチェが「非歴史的なもの」がはたらくというとき、人間による過去の「忘却」が念頭にあり、逆に「歴史的なもの」がはたらくというとき、人間による過去の「想起」が念頭にある。

ニーチェはこうした想起と忘却との力を、「造形力 *die plastische Kraft*」という語で表現している。この力の強さ・弱さを人間が過去と向き合うための力として規定するなら、自然主義的解釈の妥当性をめぐる問題に突き当たることになる。⁹⁾

第二節 想起と忘却の二重性

ニーチェは「生の哲学」の思想家であり、合理主義の立場によって抑圧されてきた人間の生き生きした本能や身体性をこそその根本に据えたという自然主義的解釈は、その先鞭をつけたザロメ以来、¹⁰⁾いまだに広く人口に膾炙するところのものである。しかしそうした自然主義的解釈に則るなら、「なぜニーチェは認識者であり続けたのか」という問いに対して、真正面から答えづらくなってしまう。

『歴史書』で掲げられた「造形力」という概念もまた、ニーチェの自然主義的解釈を後押しするもののように思える。¹⁾以下に詳しく見ておこう。

「私の考える造形力とは、みずから固有の仕方成長し、過去のものと疎遠なものとを改造して血肉化し、傷を全快させ、失ったものを補い、壊れたかたちをみずから複製する力のことである」(HL, 1: S. 251)。

こうした力を「人間や文化や民族」がどれだけもっているかによって、それらが没落せずに存続できるかどうかが決まるのだ、という。ここで規定されている力は明らかに理性的に統制されるものではない。過去を自らの「血肉にする einverleiben」とは、人間や文化や民族の「生」が、自らの現在と未来とに役立てるために過去を造り出している、ということである。実証的な客観的事実としての過去そのものなどなく、すべての過去は生きるために造られたものである。また、この数行後には「或る人間のもっとも内奥にある天性 *Natur* が強い根をもてばもつほどに、その人間はまたますます過去を自らに同化したり強制したりするであろう」と述べられており、個人々人によってこの「天性」の力をもつ度合いが異なるということが主張されている。「造形力」は、だれもがもっている理性によって統制されるのではなく、各人において異なる「自然 *Natur*」なのだ。

また、強靱な力を発揮する「天性」は、過去を改造して形をつくるということだけをその本質としているのではない。

「こうした天性は自らが征服しえないものを忘却することを心得ている。それゆえ征服しえないものは現前しておらず、地平 *Horizont* は閉ざされていて完全であり、そしてその向こうにはなお人間や情熱や教えや目的が存在することを想起させることのできるものは何一つないのである」(前掲箇所)。

つまり、ある人間の「天性」がどれだけ多くの過去を同化しようかということが同時に、どれだけ多くの過去を不正に忘れてしまいかを定めているのだ。それは彼にとってどれだけ広い地平が開けるかを規定しており、それによって地平そのものが

形づくられるのだから、地平の構成要素にならないものはそもそも存在しなかったことにさせられる。ニーチェの「忘却」概念は、或る内容を端的に忘れるということではなく、「想起」によつて地平を生じさせる働きとともに、他の忘れ去られるべき内容が地平の外にしりぞくという、「想起」と「忘却」との二重性を示す。「想起」と「忘却」は同時進行し、或る内容を忘れないようにカメラのファインダーにおさめるような働きによつて、同時に忘れ去られるべき内容がファインダーの外にしりぞくという働きなのである。「歴史書」において「想起」・「忘却」概念は切り離すことができない二重性を固有な特徴としており、また「地平」をつくり出す「造形力」の二つの契機を規定している。

第三節 歴史のあり方の三つ巴の構造をめぐって

「歴史的なもの」の想起のはたらきが、「非歴史的なもの」の忘却のはたらきと実は不可分であることが批判的に暴露されるとき、本稿第一節で述べた過去の仮象性の洞察が通奏低音となつている。「歴史書」においてニーチェが、歴史学の主張する客観性は実は独断にすぎないと批判するときも、その批判に先行して過去の仮象性の洞察があるのだ。先行研究によれば、「歴史書」におけるニーチェの立ち位置は、彼自身が設定した「歴史的なもの」、「非歴史的なもの」、「超歴史的なもの」の三つの系のうち、「歴史的なもの」の一翼であるといわれてきた。「批判的歴史」である¹²⁾。

だが、人間が紡ぎだす歴史 (Historie) は、「記念碑的歴史」、「尚古的歴史」、「批判的歴史」に大別されるものの、それらは三つ巴のあり方¹³⁾をしており、そこから「批判的歴史」だけを歴史を相対化できる特権的なものとして取り出すことはできないのではないか。さらに、ニーチェが批判した歴史学もまた、もとは「歴史的なもの」という人間の営みから生じたものではないか。「歴史的なもの」は歴史を相対化できるのか。以下でこの三つ巴の歴史のあり方を詳しく見ておこう。

「三通りの観点で歴史は生けるものに属している。すなわち活動的で努力する者、保存し崇拜する者、苦悩し解放を求めらる者に。これら三様の者たちの関係には、三つの歴史のあり方が対応する。つまり、区別を設けることが許されるならば、歴史の記念碑的あり方、尚古的あり方、批判的あり方である」(HI, 2: S. 258)。

ここで気をつけなければならないのは、歴史をつむぐ者が三種のうちの如何なるタイプの間であるか、ということとは相對的にしか決まらないということである。視点のとり方によって、或る者が「活動的で努力する者」にも見えようし、「苦惱し解放を求める者」にも見えよう。第二節で取り上げた「造形力」の強弱であるともいえよう。しかし、ニーチェはなぜこのような素朴な自然主義だといわれかねないような表現を用いたのか。歴史をつむぐ者の実存を、振れ幅のある豊かなものとして叙述するためである。三種の典型が選ばれたのは、それらがまさに三つの歴史のあり方に対応するからにほかならない。ニーチェは先述したような「歴史的なもの」という人間の時間理解の構造についての洞察から出発し、三つの歴史のあり方がどのような「想起」をもたらしているかを主題的に考察している。

「記念碑的歴史」は「偉大なもの」が永遠であるようにと求める。「偉大なもの」とはすでに過ぎ去った瞬間のうちの最高の瞬間であり、これを再び自らの手で取り戻し、将来にわたって永遠となることを求めるのである。この歴史においては「偉大なもの」たちが卑小な数多の瞬間を飛び越えて連関する。その連関を結束させるのはコミットメントであり、そうして「偉大なもの」の模倣への要求があまりに強くなつたとき、「過去が何らかずらされ、より美しいものに解釈し直され、そうして自由な作り話に近づけられる危険がまぬかれがたい」(HL, 2: S. 262)。「記念碑的歴史」は数多の瞬間を不正にも忘却し、「偉大な」過去を不正に改変してでも、想起したい瞬間にこだわるのである。

「尚古的歴史」は古くから崇拜されてきたものをそのまま保存しようとする。「記念碑的歴史」がありありと過去を現在に復活させようとする模倣によって、過去を塗り替えてしまうことすらいとわなないのに対して、「尚古的歴史」は未来に関心をもたず、「記念碑的歴史」と対立する。この対立は、「記念碑的歴史」が「偉大なもの」という特異な点にコミットするのに対して、「尚古的歴史」が歴史学のような客観的な歴史にいつでも近づきうるということを示している。つまり「尚古的歴史」が行き過ぎれば、「なお視野に入ってくるすべての古いものと過ぎ去ったものは等しく尊敬すべきものとして単純に受け取られる」危険があるのだ(HL, 3: S. 267)。すべての出来事を等価値に評価しようとする者として、過去の撰取によって自らが変容するところの想起と忘却の「地平」を考慮しない傍観者としての近代人の態度を思い浮かべることはたやすい。

「批判的歴史」は「正義 Gerechtigkeits」の法廷としてあらゆる過去に有罪判決を下し解体しようとする。過去は常に仮象でしかなく、人間は生きている限り特定の過去を捏造し他のコンテクストを忘却するという「不正 ungerrecht」を犯し続け

る。生きながらえるためには自らの「不公正」を忘れてしまわねばならない。「批判的歴史」はそうして、すべての過去を現在から切り離すべく有罪判決を下すのであり、すべての歴史の内容を拒絶する (HL, 3 : S. 269)。それゆえ「批判的歴史」は、「記念碑的歴史」とも「尚古的歴史」とも対立するように思える。

以上の三つの歴史のあり方についての叙述は『歴史書』の第二節と第三節にまとまっている。しかしいずれの説明も、そのうちのひとつの歴史のあり方を独立して取り上げること拒否するような叙述となっている。例えば「批判的歴史」についての説明がなされている箇所では、「記念碑的歴史」や「尚古的歴史」の概念内容の癒着が見られる。「自分がそこから実際に由来した過去に対立して、そこから自分が由来したいと思うような過去をいわば後天的に自らに与える」という「危険な試み」について語られている箇所である (HL, 3 : S. 270)。「批判的歴史」は「常に危険で、また危険にさらされた人間と時代」のものであるはずだが、自分が由来したいと思うような過去を新たに想起し、それを保持しようとするのは「記念碑的歴史」や「尚古的歴史」のあり方である。「批判的歴史」は独力で歴史の内容を拒絶することしかできず、「生」に奉仕するために「記念碑的歴史」や「尚古的歴史」を必要とするのだ。ニーチェはおそらく意図的にこうした癒着を散りばめており、歴史の三つのあり方が三つ巴にしか機能しないということを固持している。だからこそ、第四節冒頭で以下のようにまとめられるのである。

「以上は歴史が生のためになす奉仕である。すべての人間とすべての民族はその目標と力と苦難に応じて過去の或る種の知識を、時には記念碑的歴史として、時には尚古的歴史として、時には批判的歴史として必要とする」 (HL, 4 : S. 271)。

「生」はコミットすべき歴史内容を必要とする。「生のためになす奉仕」であるためには、「批判的歴史」だけをニーチェの立場として取り出すことはできないのだ。さらにこの三つ巴構造は、「尚古的歴史」が暴走する可能性、すなわち「歴史的なもの」が歴史学の母体となる可能性さえも引き入れてしまっている。「生」と無関係な、客観的な科学としての歴史学が営まれる可能性の担保によって、非合理的な「生」をニーチェの立場として取り出すような自然主義的な解釈はここでアポリアに陥る。つまるところ、「歴史的なもの」の内部にある「批判的歴史」も、歴史の科学化と対立する趨勢である「生」も、歴史

そのものを相対化して批判する契機を準備しえない。歴史のストーリーテラーも、そもそも合理化を拒否する「生」も、「歴史的なもの」そのものを相対化して批判することはできないからだ。『歴史書』においてそれを可能にしたのは、そもそも過去と如何に向き合うべきかを問うた哲学者としてのニーチェであり、こうした思惟の営みは歴史哲学の名で呼ばれるべきものである。^[15]『歴史書』の段階でニーチェはそれを明瞭に叙述できてはいないが、本稿第一節で述べた過去の仮象性の洞察(HI, I: S. 248)はその萌芽であり、『歴史書』とそれ以降の思索を接続するとき、この箇所解釈が重要な手掛かりとなることは間違いない。

結語

本稿では、『歴史書』における「歴史的なもの」と「非歴史的なもの」との対比を、「想起」と「忘却」との二重性から読み解くという試みを行なった。それによって、ニーチェの「造形力」概念がそうした二重性のもとに働く原理として考えられていることを明らかにした。しかしながら、この自然主義的な概念は、歴史記述の内容の正しさを規定する決定的な尺度の不在という消極的な結論を準備するものであった。とはいえ本稿での「造形力」概念についての考察は、ニーチェの「力」の概念と歴史哲学とのねじれた結びつきに光を当てた。このテーマは中期・後期に引き続く承譜をもっており、ニーチェは尺度の問題を通時的に思索し続けた。具体的には、中期に「力の感情」、後期に「力への意志」として変遷した「力」の概念の変遷史をたどることができる。その表出であった「過去と如何に向き合うか」という問いは、『歴史書』以後もニーチェにとつて根本問題となったのである。ハイデガーも注目したとおり、ニーチェにとつてどこまでも追いかけてくる仮象としての過去の理解は、その思索の通奏低音であり続けた。

凡例

ニーチェのテクストは以下のものを使用。 *Sämtliche Werke: Kritische Studienausgabe*. Hrsg. von G. Colli und M. Montinari. München, Berlin/New York, 1980 (KSA). 「生に対する歴史の利害」(『歴史書』と略記)からの引用は本文中に (HL, 節番号・KSAでの頁数) で示した。なお、原文の強調は省略した。

註

- (1) ショーペンハウアーからの引用は以下の邦訳を参照した。塩屋竹男訳『ショーペンハウアー全集6』(意志と表象としての世界 続編Ⅱ)、白水社、一九九六年、三百八十八頁 (Schopenhauer, A. 1844 (1819). *Die Welt als Wille und Vorstellung* 2. Aufl., 2 Bd., Zweiter Band.)。ショーペンハウアーの歴史学批判はアリストテレス以来の伝統に基づくものである、という。いわく、アリストテレスは「詩」(創作)は歴史よりも哲学的であり、価値が高いと言っている(『詩学』第九章)。(前掲書、三百八十七頁)。歴史学の営為は、もとより究めつくされ得ない無数の経験的な個別の事象の探究である。これに対して、詩作は創造的営為である。ニーチェは歴史学とは異なる歴

史記述のあり方を考察し、そこに芸術性を見ようとする(「記念碑的歴史」として歴史記述の芸術性を認める)点でショーペンハウアーとは異なる考えに立つと言える。「記念碑的歴史」については本稿第三節を参照のこと。また、ショーペンハウアーのいう歴史 (Historie) は、歴史学批判の文脈と「意志」の自己意識化としての歴史の文脈とは意味が異なる。

- (2) 「生に対する歴史の利害」というタイトルそのものが含み持つ問題については、須藤訓任「ニーチェの歴史思想―物語・発生史・系譜学―」、大阪大学出版会、二〇一一年、六十七頁以下を参照のこと。

- (3) 文献学における歴史主義化に与する者として、『悲劇の誕生』(一八七二年)を痛切に非難したヴィラモウウィッツ II メレンドルフ (Ulrich von Wilamowitz-Moellendorf) が一例として挙げられよう。これに対してニーチェは人文主義の系譜に自らを置いている。この系譜は「文献学 Philologie」というディシプリンを創設したヴォルフ (Wolf, F. A.) やローゼ (Rose, V.) などに代表されるもので、テクストが歴史的な変遷の中で隠ぺいされたり歪曲されたりした可能性があることを前提する、という批判的方法をとる。本稿で主張した『歴史書』の根底にある過去の仮象性の洞察は、こうした伝承されたテクストそのものへの批判的まなざしをもつ「文献学」の伝統に

よって醸成され、哲学者としてのニーチェによって表現を得たのである。ニーチェと古典文献学との関わりについては以下を参照のこと。村井則夫「文献学・修辞学・歴史学―初期ニーチェにおける言語と歴史―」、「理想」第六百八十四号所収、理想社、二〇一〇年、四十二―六十頁。とりわけ、「歴史の科学化」とそれに対するニーチェの批判については以下を参照。三島憲一「初期ニーチェの学問批判について―ニーチェと古典文献学―」、「ニーチェとその影」所収、講談社学術文庫、一九九七年、十一―七十二頁。同論文はニーチェが自然主義の立場から同時代の「科学」一般を否定したのではなく、歴史学による過去の解釈の仕方の問題にしたことを強調している。この論点は本稿執筆の重要なきつかけとなった。

(4) 西尾幹二「ニーチェ」第一部、中央公論社、一九七七年、三百二十三頁以下を参照のこと。

(5) その上、歴史学は人間を肥えさせるどころか、内面に「消化不良の石」を溜め込むことになる。「人格性」については『歴史書』の第五節に詳しく述べられており、この「人格性」を軸にした解釈としては以下のものが挙げられる。Bertram, E., 1921. Nietzsche: Versuch einer Mythologie, Georg Bondi, Berlin. ヘルトラムはニーチェが古代ギリシャの哲学者たちのごとき人格の「偉大さ」を自らにまとおうとし、自らを神話化しようとした、と

いう解釈をしている。本稿では、そうした人格の「偉大さ」の尺度の不在がそもそも問題にされるべきだと考える。

(6) 歴史との適切な向き合い方としての「尺度」の知がないからこそ、「過剰」が生じてしまう。この問題はそれぞれの原語を見れば明らかである。尺度を越えて (über) 歴史を撰取してしまうことが、「過剰 Übermaass」であるからだ。こうした尺度の不在 (Malsogkeit) 問題については、Gerhardt, V., 1992. Friedrich Nietzsche, Beck, München, S. 25-29 を参照。また、同書で Gerhardt は『歴史書』におけるニーチェの「尺度」についての意識の高さを克明に描いており (S. 101-108)、本稿はそこから大きな刺激を受けた。ゲルハルトによれば、ニーチェの歴史学批判は、尺度としてふりかざされる「客観性」という過去に対する裁判権を、歴史学が実は持っていないということを批判しているのだという。そしてニーチェが三つの歴史のあり方を持ち出したのは、文化が価値の複数性 (Pluralität) によってこそ生まれる、ということとを洞察したからだ、と解釈される (S. 109)。本稿はこの解釈に対して、三つの歴史のあり方のうち「尚古的なもの」が歴史学の母胎となりうる可能性を含み持っていることを示し、価値の多様性のうちに「客観性」の追求への萌芽さえも含まれるということを示そうとす

る点で Gerhardt とは異なる立場にある。

(7) 「歴史書」における時間理解については、村井(二〇一〇年)を参照のこと。本稿でふれなかった「超歴史的なもの das Ueberhistorische」は「形而上学」・「芸術」・「宗教」であり、「歴史的なもの」と「非歴史的なもの」の二つを相対化する永遠性、普遍的理念や自然法則を指す(HL, 1: S. 254f, HL, 10: S. 330)。ニーチェは『悲劇の誕生』における形而上学的な立場から脱しきれておらず、『歴史書』においても「超歴史的なもの」への期待はいまだ消えていない。とはいえ、「歴史的なもの」と「生」との健全な関係を歴史の科学化から取り戻そうというときに、それを歴史を飛び越えてしまう「超歴史的なもの」に期待するのは本末転倒である。それゆえニーチェは「歴史的なもの」の内部で考察を推し進めようとし、「超歴史的なもの」とは一定の距離をとっているといえる。須藤(二〇一一年)によれば、『悲劇の誕生』(一八七二年)は「対象としての歴史」を物語るために形而上学を支柱としなければならなかったが、『歴史書』(一八七四年)において「歴史的過去を裁くとはいかにして可能なのか」という問題に突き当たると、その困難の自覚から、ニーチェはストーリーテラーであることをやめ、歴史を「認識の方法として形而上学批判のための道具に活用する」ことへと転換し、『人間的、あまりに人間

的』(一八七八―一八八〇年)において「思考の発生日」を表明するにいたる。「方法としての歴史」である。須藤(二〇一一年)、十頁以下、六十七頁以下、及び百十五頁以下を参照のこと。本稿では、批判に先立つ歴史を相対化する認識を過去の仮象性の洞察として『歴史書』内部で取り出した。

(8) ハイデガーによる一九三八・一九三九年冬講義を参照。Heidegger, M., 2003. „Zur Auslegung von Nietzsches II. Unzeitgemässer Betrachtung“, *Gesamtausgabe* Bd. 46, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Mein. 本稿がハイデガーによる解明の方向に沿うことにしたのは、ニーチェの「忘却」概念を考察のための出発点として取り上げているからである。ハイデガーは、忘却していることを忘却しているという「存在忘却」を根本において考察している。つまり、存在を忘却しているからこそ人間は存在者しか想起できない、というのだ。ハイデガーは、ニーチェによる人間の理解を「理性的動物」として規定する。「理性的動物」とは存在者の想起にとらわれ続ける人間のことなのだ。本稿はこうしたハイデガーによる解釈の到達点から出発しつつ、その特異な論点との差別化のため、ニーチェの「想起」・「忘却」概念に改めて着目した。ハイデガーはニーチェの「想起」・「忘却」概念が「統一性 Einheit」をまつているとし、「想起」は存

在者の「表象」として片づけてしまふ。しかし、不正にも「忘却」してしまつてゐることが如何に正しく「想起」されるかという問いが『歴史書』の主導問題なのである。「想起」と「忘却」との二重性に「着目するべきであり、正しい過去の想起などありえないといつて」とつまり過去の仮象性の洞察を読み取るべきである。紙幅の都合上指摘するに留めるが、こうした過去と如何に向き合うかという問題をハイデガーが聴き取つて、「存在忘却」という論点を形成したと考えることもできよう。

- (9) 『歴史書』におけるニーチェの自然主義問題に関しては以下を参照した。清水真木「ニーチェは健康な人間の作り方を教えるか」、『理想』第六百八十四号所収、理想社、二〇一〇年、三十一〜四十一頁。この論文によれば、『歴史書』でニーチェは「忘れることができる」というのは「健康の証である」と述べ、「忘れることができれば健康になれる」と読めてしまふ。しかし、後期にいたつてはつきりしたニーチェの考えは、健康に「なる」ということはできないというものであつた。「忘却」は、身につけるということができないのである。それゆえ「非歴史的なもの」は自然な資質として人間に内在するものであるが、自覚的に行使されるものではない。

- (10) 最も早い時期に最も近いところで思想家としてのニーチェを発見したのはザロメである。その解釈はレー

ヴィットをはじめ後代の研究者に受け継がれ、今日でもなおニーチェの思想を初期・中期・後期に分ける区分は慣例となつてゐる。Andreas-Salomé, *L.*, 2000 (1894), *Friedrich Nietzsche in seinen Werken*. Hrsg. v. E. Pfeiffer. (原佑訳「ルー・ザロメ著作集三巻」) (「ニーチェ、人と作品」)、以文社、昭和四十九年)。Löwith, K., 1984 (1936), „Jacob Burckhardt“, *Sämtliche Schriften*, Bd. 7, Hrsg. v. Metzler, Stuttgart. Löwith, K., 1986 (1935), *Nietzsches Philosophie der ewigen Wiederkehr des Gleichen*, Hamburg.

- (11) ニーチェの「造形力」概念については、以下を参照せよ。Christians, I., 2002. *Reiz und Sporn des Gegensatzes: Zu Friedrich Nietzsches Konzeption der Kraft, Würzburg*. 同書によれば、「この概念は人間の生存(Dasein)が自己造形する「有機体的な機能」と「模倣の能力」とを備えていることを規定している。この時期のニーチェの「模倣」の概念はセネカのレトリックを批判的に受容しており (S. 48f.)、「造形力」概念にも大きな影響を与えているのだという。同書は試みに「造形力」を「想起」の正しさの確かな尺度として検討しているが、ニーチェが合理主義的な道徳に反対して非合理的な「生」や「本能」を新たな正しさの尺度としてしているとする自然主義的解釈とは一定の距離をとる (S. 96)。『歴史書』に

おける「造形力」は芸術的な力であり、客観的な正しきの尺度にはならないのだ。「芸術力」については、山本恵子「ニーチェと生理学」「芸術の生理学」構想への道」、大学教育出版、二〇〇八年、八十四頁以下を参照のこと。

- (12) 「批判的歴史」を『歴史書』におけるニーチェの立場とし、またこの歴史哲学的な思惟が後期の「系譜学」とつながるとする解釈は、従来多くの研究者によって指摘されてきた。たとえば村井(二〇一〇年)、Nehamas, A. 1994. "The Genealogy of Genealogy: Interpretation in Nietzsche's Second *Untimely Meditation* and in *On the Genealogy of Morals*" in: Nietzsche, *Genealogy, Morality: Essays on Nietzsche's Genealogy of Morals*. Schacht, R. (ed.), University of California Press, pp. 269-283. 竹内編史「ニーチェ」生に対する歴史の利害の問題圈』『実存思想論集』xiii、理想社、二〇〇八年、百三十九〜百五十六頁。湯浅弘「ニーチェと歴史—歴史的なものとは非歴史的なもの・超歴史的なもの—」『倫理学年報』第三十九集、日本倫理学会、一九九〇年、六十七〜八十三頁。本稿では、「歴史的なもの」の三つ巴構造のゆえに、そして批判のためにはそれに先立つ過去の仮象性の洞察が必要であると考え、「批判的歴史」のみをニーチェの立場として取り出すことはできないという結論に達した。それは、過去を裁きうる「正義(Gerechtigkeit)

を行使する特権をだれももちえないためでもある。こうした『歴史書』における「正義」成立の難点については、須藤(二〇一一年)、八十六頁以下を参照のこと。

- (13) 「歴史書」における「歴史」産出のあり方の三つ巴構造に關しては、村井(二〇一〇年)および湯浅(一九九〇年)を参照のこと。

- (14) 村井(二〇一〇年)によれば、「造形力」は過去のばらばらな諸点をつなぎ、非連続の連続を生み出す「力」の「遠隔作用 *actio in distans*」(Frühjahr 1873, 26[12], KSA Bd. 7, S.579.) がニーチェによる歴史の力学的理解とくづ前提されている。

- (15) 歴史をニーチェ哲学の主要なテーマとして取り上げているものとして、須藤(二〇一一年)や Picht, G., 1988. Nietzsche, Stuttgart: Klett-Cotta が挙げられる。Picht は「ニーチェによって歴史が哲学の唯一の内容となった」という命題を掲げた(S. 15)。これはニーチェの歴史についての思惟を西洋思想史上特異なものとして評価する命題である。ランケ (Leopold von Ranke) によるヘーゲルの科学的な歴史哲学に対する批判以後、十九世紀にいたって歴史の科学化の趨勢が起こったが、ニーチェの時代を経て二十世紀にいたると歴史学は物語論の見地から批判されて歴史修正主義までが生じた。本稿では歴史学を相対化して批判するきっかけとなったニーチェの思惟を歴

史哲学と呼んだが、それは上記の思想史においてニーチェの思惟を歴史学から物語論への転換期における特異な哲学的思惟として位置づけるためである。ニーチェは仮象論を出発点にして考察している。歴史は現在の解釈視座から見られたものにほかならず、その都度のオリエンテーションを必要とするものである。そうして肥沃な活動領野を獲得し続けるオリエンテーションの営みがニーチェの歴史哲学である。こうした目論見がはじめて表出したのが『歴史書』における過去の仮象性の自覚であるが、いかにして仮象の仮象性が自覚されるのかという問題そのものは『悲劇の誕生』から引き継がれたものである。この問題についてのニーチェの考察は、中期ニーチェにおける解釈視座 (Perspektiv) の自由論を経由して、後期ニーチェにおける「権力への意志」説まで及ぶものであり、ニーチェ哲学の通時的な根本問題であるといえるだろう。